六鈴の由来について

形全体は古代婦人の装身具のひとつであった鈴釧（すずくしろ）をもとに図案化された。
その鈴を六個、現代風の鈴の形にして円形に組み合わせると、中が六角形になり、六稜の鏡の形となる。
鏡と鈴が配されていることが婦人の生活の理想を象徴するものされた。
最初は「女専」の二字を配しており、後に「大学」の二字に代えて校章としていた。
～昭和56年の会報より抜粋～

長野冬季オリンピックでは記念のピンバッジが大変な人気になった。それをヒントに六鈴会では、会員が心をひとつにするとともに、遊び心を入れながら楽しく四大推進運動を盛り上げる目的と、母校七十周年記念品として、ピンバッジを作製した。女専の校章を七宝焼きで作製することとし、デザインは白を基調に、中心の字「女専」を「六鈴会」に変えた。
～全史より抜粋～

長野県立大学開学時に大学の同窓会として「六鈴会」の名前を継承することになり、現在は「六鈴会」のシンボル・象徴となっている。

歴代役員

六鈴会正副会長在任期間

	会長	在任期間	副会長	在任期間	副会長	在任期間
初代	酒井武代	1971～1978	倉田君子	1970～1978	近藤多鶴子	1971～1991
２代	倉田君子	1978～1996	御所窪た津枝	1978～1988		
			岡田幸子	1988～1996	小林朋子	1991～1996
３代	小林朋子	1996～2004	荒井幸子	1996～1998	田村肇子	1996～2002
			上原綾子	1998～2003		
			飯澤佐智子	2003～2008	岡村昭子	2002～2008
４代	近藤多鶴子	2004～2008				
５代	岡村昭子	2008～2019	宮崎孝子	2008～2010	生稲みち子	2008～2018
			竹内洋子	2010～2014		
			村澤初子	2014～2015		
			市場祥子	2015～	小林喜美枝	2018～2019
６代	小林いせ子	2020～			黒岩京子	2020～

六鈴会事務局員在任期間

事務局長	在任期間	書記	在任期間
由井千春	1978～1990	長坂希代子	
		飯澤佐智子	1984～1989
浜本レイ子	1990～1991	渡辺満子	1989～1999
塚田とめお	1992～1999		
渡辺満子	1999～2003	降旗和子	1999～2002
上原綾子	2003～2006	岩田良子	2002～2010
竹内洋子	2006～2010		
岩田良子	2010～2016	横田由美	2010～2016
		松田美千代	2013～2014
横田由美	2016～2022	袖山順子	2016～2022
多田みち子	2022～	宮島幹子	2022～2022
		坂東美佐子	2023～

「新しき世に」歌碑について

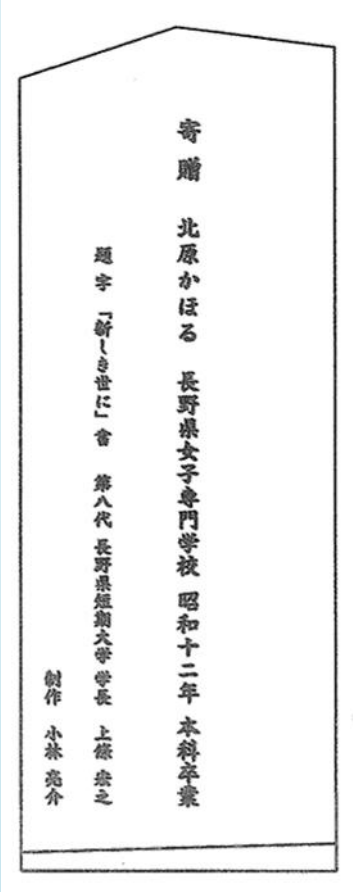
これまで90余年にわたり、ここ三輪の地で歴史を紡いできた母校。今後の更なる発展を願う私たち同窓生の思いを、小林亮介先生が歌碑のデザインに込めてくださいました。

平成28年4月22日、北原かほる様の甥御様ご夫婦にもご参列をいただき、総勢68名で除幕式を行いました。
終わりに「新しき世に」を斉唱、母校への思いを共有し、同窓生の絆を深める会となりました。

新しき世に

作詞 井上柳梧
作曲 久田貞祐

題字



寄贈 北原かほる 長野県女子専門学校 昭和十二年 本科卒業

題字「新しき世に」舎 第八代 長野県短期大学 学長 上條宏之

制作 小林 亮介

側面

制作 小林亮介先生
長野県短期大学
幼児教育学科教授

故・北原かほる様（昭12専・本科卒業）のご遺志により、ご遺族からご寄付をいただきました。
（平成27年会報第35号に掲載）

平成28年の会報に掲載された上條宏之先生の追悼文

平成28年（2016年）9月1日

追悼・北原かほるさん

学長 上條宏之

「新しき世に」の建碑記念式典に臨み、改めて北原かほるさんを追悼した。本学学長に就任し、個性豊かで魅力的な、多くの六鈴会の皆さんと出会ったが、北原さんは特別な人であった。

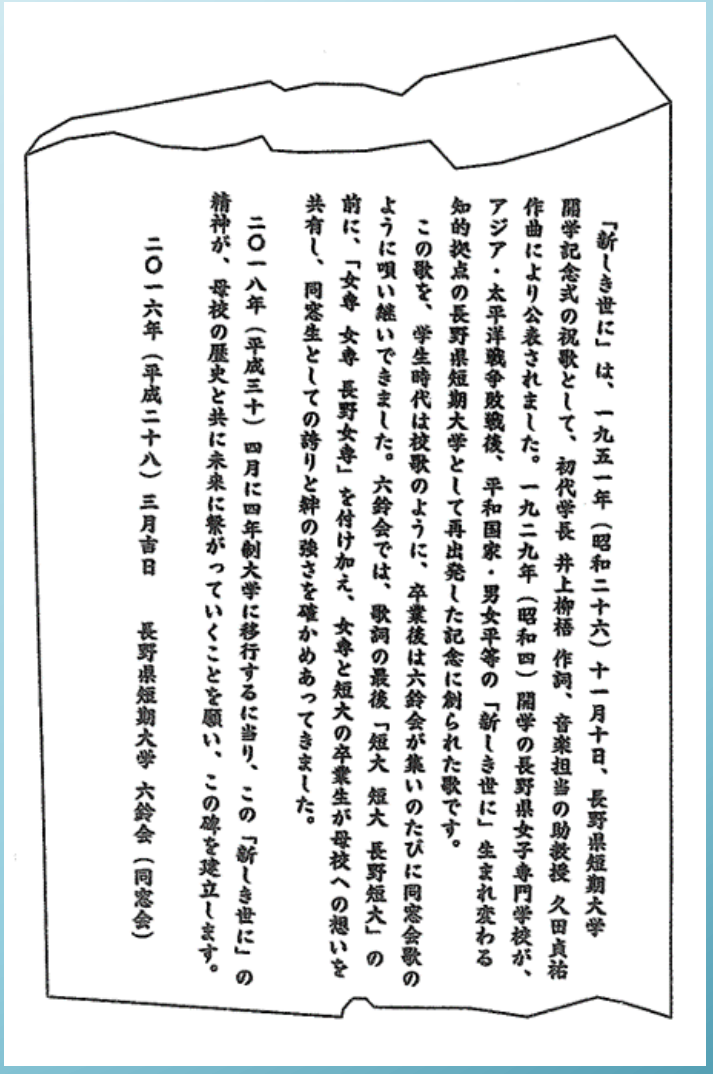
九十歳前後まで、横浜から自家用車で出てこられた北原さんは、多弁をろうせず、急所を捉えた話をされた。その北原さんに私が惹かれたことは紛れもない。が同時に、北原さんが幼い頃、長野市県町教会に明治三十五年～昭和九年の三十三年間在職したカナダ人宣教師ダニエル・ノルマンと交流があり、大正七年にノルマンがカナダの友人から贈られたT型フォードに乗せて貰った話などに、私は引き付けられた。

昭和二十九年九月、青函連絡船の洞爺丸が台風で沈没、千百五十五人の死者・行方不明者が出た。私の大学一年生のときで記憶に残っている。そのとき、外国人宣教師アルフレド・ストーンさんが海に投げ出されたあと、手品で子どもを和ませ、救命具を着せてやり、自らは遭難死をされた話をされた北原さんが、「ストーンさんは県町教会に居られたのです」と、誇らしげに語ってくださった。そのことが忘れられない。

北原さんの宗教的心情をお聞きしたことはないが、生涯を若い人々の教育に傾注し、母校への篤い想いを持ち続けられた姿には、ストーンさんが子どもの救済に自分の命を賭けた行為と通底するものがあると、私はほぼ確信する。

北原さんが長野女専二年生のときに、『学友会雑誌』第七号（昭和十一年三月）に投稿した随筆「スキー」と短歌一首が私の目に留まった。スキーをスポーツとして楽しんだだけでなく、「偉大な自然の中に包まれて一種特別な崇高な感じを抱く事」に価値があると記している。短歌は「わが父の老いるを見てはものさびし　わが母のなき今日この頃に」である。活発にスキーを楽しむ心の底に、亡き母、老いる父を思いやる若き北原さんの生活心情は、最晩年までの生き方にそのまま続く。

裏面



「新しき世に」は、一九五一年（昭和二十六）十一月十日、長野県短期大学開学記念式の祝歌として、初代学長 井上柳梧 作詞、音楽担当の助教授 久田貞祐作曲により公表されました。一九二九年（昭和四）開学の長野県女子専門学校が、アジア・太平洋戦争敗戦後、平和国家・男女平等の「新しき世に」生まれ変わる知的拠点の長野県短期大学として再出発した記念に創られた歌です。

この歌を、学生時代は校歌のように、卒業後は六鈴会が集いのたびに同窓会歌のように唄い継いできました。六鈴会では、歌詞の最後「短大 短大 長野短大」の前に、「女専 女専 長野女専」を付け加え、女専と短大の卒業生が母校への想いを共有し、同窓生としての誇りと絆の強さを確かめあってきました。

二〇一八年（平成三十）四月に四年制大学に移行するに当り、この「新しき世に」の精神が、母校の歴史と共に未来に繋がっていくことを願い、この碑を建立します。

二〇一六年（平成二十八）三月吉日　長野県短期大学 六鈴会（同窓会）